

[各種報告：査読付]

九州共立大学リコンディショニングルームにおける
アスレティックトレーニング現場実習の充実に向けて

中村 奈菜*, 篠原 純司*, 粟谷 健礼*, 辰見 康剛*

**Towards improving athletic training practice at the Kyushu
Kyoritsu University Reconditioning Room**

Nana NAKAMURA*, Junji SHINOHARA*, Takenori AWATANI*,
Yasutaka TATSUMI*

No English abstract

1. はじめに

九州共立大学リコンディショニングルーム（以下、RCRとする）は、アスレティックトレーナー（以下、ATとする）を目指す本学スポーツトレーナーコース所属の学生トレーナー（以下、学生ATとする）および、ATを目指す学生が所属する学生トレーナー部CAREのアスレティックトレーナー養成のための実習現場として機能している。RCRにおける実習活動は、日本体育協会（以下、日体協とする）の定めるATの役割である以下7項目、スポーツ外傷・障害の予防、スポーツ現場における救急処置、アスレチックリハビリテーション（以下、アスリハとする）、コンディショニング、測定と評価、健康管理と組織運営といった内容をもとに実践している。¹⁾ 学生ATは、本学学友会体育会系部活動に所属する学生アスリートを対象に、アスリハ、コンディショニングなどのサポートを提供している。（Fig.1.2）

1) 調査背景

RCRを利用する学生アスリートは、急性の外傷を負った直後であったり、通院中や手術前・手術後、競技はしているが慢性的な障害を抱えていたりするなど、身体の状態は様々である。そして、受傷した時期や傷害の重症度、競技のシーズンなどにおいても学生アスリートの置かれている状況は様々であり、RCRに求めるサポートの内容も異なる。

2) 調査目的

本調査は、学生アスリートの利用目的や利用状況を調査することにより、学生ATが質の高いサポートを提供し、充実した実習活動になるよう検討することを目的とした。



Fig.1 Athletic rehabilitation



Fig.2 Conditioning

2. 方法

1) 対象

利用目的に関しては、学生アスリートが来室した際に記録する新規来室の記録書、2016年度の83件と2016年度の59件の記録を調査した。この新規来室者の記録書（付録.1）には、アスリハ、コンディショニング、傷害相談、応急処置、病院紹介など、来室した目的を選手に記録してもらうようになっている。また、この記録書は1部位につき1件を記録しており、1人に対し複数の記録書を作成しているものも含まれている。

利用状況に関しては、RCRの来室記録書を対象とした。来室記録書には、1日毎に来室した学生アスリート名が記録されており、各学生アスリートの来室回数を調査した。

2) 統計学的分析

2015年度と2016年度の利用目的と利用状況については、 χ^2 検定を用いて比較した。

3. 結果

2015年度、2016年度ともに、アスリハ目的に来室する学生アスリートが半分以上の割合を占めていた。（Fig.3.4）

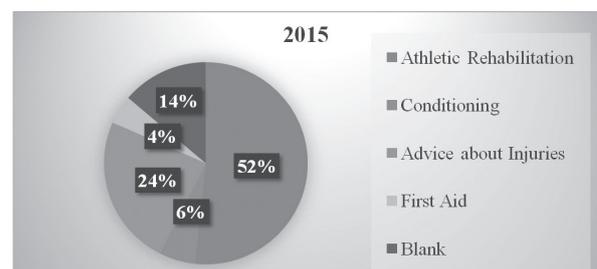


Fig.3 The purpose of using of RCR in 2015

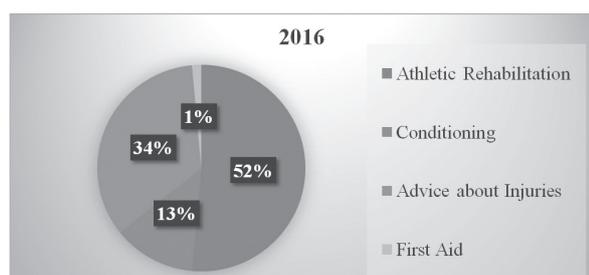


Fig.4 The purpose using of RCR in 2016

2016年度は2015年度に比べ、新規来室者数、述べ人数ともに減少していた。そこで2015年度と2016年度を比較したところ、有意な差は認められなかった。 $(\chi^2=2.999, p=0.083)$ (Table.1) また、両年度における1回利用者と複数回利用者において、関係性は認められなかった。 $(\chi^2=0.139, p=0.709)$ (Table.2) さらに、アスリハを利用目的として来室した学生アスリートにおいて、1回利用者と複数回利用者における関係性も認められなかった。 $(\chi^2=0.213, p=0.645)$ (Table.3)

Table1 The relationship between the number of students athletes who utilized the RCR and the cumulative total number of student athletes who visited the RCR

	The number of students athletes who utilized the RCR	The cumulative total number of student athletes who visited the RCR
2015	83	554
2016	59	286

Table2 The relationship between the number of student athletes who visited the RCR only once and the number of student athletes who visited the RCR more than once

	The number of student athletes who visited the RCR only once	The number of student athletes who visited the RCR more than once
2015	32	51
2016	23	36

Table3 The relationship between the number of student athletes who visited the RCR only once and the number of student athletes who visited the RCR more than once for the athletic rehabilitation

	The number of student athletes who visited the RCR only once for the athletic rehabilitation	The number of student athletes who visited the RCR more than once for the athletic rehabilitation
2015	12	33
2016	8	28

4. 考察

利用目的に関しては、2015年度、2016年度ともにアスリハが半数以上の割合を占めており、次いで傷害相談、コンディショニング、応急処置の順であった。

アスリハに関しては、利用者の多くの割合を占めており、実習活動の中心となっている。RCRにおけるアスリハは、医師の診察後にATによる評価、問題点とリスクの抽出、到達目標の設定、プログラムの確立、アスリハの指導と実践といった日体協の示すアスリハの流れをもとに行っている。²⁾しかし、問題点としては、診察より先にRCRに来室する学生アスリートも存在するため、医師による診断結果やアスリハの指示を待っている間は、患部外のトレーニングが中心となり、患部に対するリハビリテーション開始が遅くなってしまいうこともある。そこで、スムーズなアスリハ開始のためにも、アスリハを利用目的とする学生アスリートには、RCRを利用する前に、病院受診をしてもらうように、環境を整えていく必要があると考える。またその他、部活動の練習状況によっては、なかなかRCRを利用できない場合もあり、ケガが治っていない状態であったり、到達目標に達しないままであったり、アスリハの途中でフェードアウトする学生アスリートが存在する点でも課題が残る。リハビリテーションの段階には、保護期、訓練前期、訓練後期、復帰期、再発防止期といったフェーズがあり、学生ATの実習の質を高めていくためにはどのフェーズも欠かすことはできない。また、ATにとっては訓練後期から再発防止期が大きな役割を占めているため、このフェーズにあたる学生アスリートをみることも学生ATにとって重要な学びになるため、フェードアウトする学生アスリートを防止することも必要であると考えられる。そのためには、RCRに来室できない状況の時には、身体の状態や経過を学生アスリートに報告してもらい、その都度可

能なアスリハの提案をするといったフォロー体制づくりも学びに繋がっていくのではないかと考える。

傷害相談に関しては、利用目的において2番目に大きな割合を占めているが、単発の利用の人が多数である。聞き取りや評価、そして今後についての提案といった対応を行っているが、単発利用の学生アスリートのその後を把握出来ていない点では課題が残る。その後の状態が把握出来たとすれば、アスリハやコンディショニングなど、サポートの機会に繋がる可能性がある。そこで、傷害相談後に2度目の来室のない学生アスリートに対しては、一定期間後、傷害の状態や傷害相談時に提案した内容がどうであったかを調査することが出来れば、フィードバックにもなり、傷害相談対応の質の向上にも繋がると考える。

コンディショニングに関しては、復帰後や試合前の学生アスリートが身体の調整に来室する。現在のところ、コンディショニング前とコンディショニング直後の身体の状態の聞き取りは行っているが、コンディショニング実施後の競技における状態は把握出来ていない。傷害相談と同様、アンケート調査を行うことでコンディショニングの質を向上させるために有効だと考える。

応急処置を目的に来室する学生アスリートの割合は、両年度とも5%未満で多くはないが、怪我をした直後の対応であるため、素早く適切な対応や判断や処置が求められる。そのため、学生ATは、創傷の処置やRICE処置などの知識と技術を習得し、いづどんな場面でも対応できるように備えていくことが重要であると考え。そのため、過去にRCRで対応した症例やスポーツ現場で好発する傷害を想定し、ケーススタディを行うことも有効だと考える。しかし、RCRでは来室割合が示すように、実際に応急処置を実践できることは少ない。そのため、ケガが発生した際には、RCRに連絡をいれてもらい、対応に駆けつけるといった新たな取り組みの体制を検討し、実践の場を増やすことも必要だと考える。

2015年度は利用目的が未記入のものもあった。しかし、2016年度は利用目的を未記入の学生アスリートがいなくなった点では、学生ATが対応する中で学生アスリートの利用目的の聞き取りを漏れのないように行い、きちんと記録を残す作業に徹するなどの改善があったとも考えられる。

利用状況に関しては、2016年度は、2015年度と比べ、新規来室者数・述べ人数ともに減少しており、新規来室者数は約20名、述べ人数に関しては、半数近

くの約250名も半減してしまっていた。2016年度のようにRCRを利用する学生アスリートが減少してしまうことは、学生ATが実際にみることのできる症例の種類や件数ともに減少することに繋がり、充分に実習活動が行えない可能性が危惧される。また、現在RCRで実習活動をする学生ATは1日あたり10名程度である。それに対し、RCRを利用する学生アスリートは、1日あたり2～3名程度であり、学生ATの方が多いのが現状である。サポートの質をあげることはもちろんRCRの機能として必要なことではあるが、学生AT教育においては、利用する学生アスリートの人数確保も重要な課題だといえる。そうすることで多くの症例にふれ、より多くのことを学ぶ環境になっていくと考えられる。そのため、今後はRCRを利用する学生アスリートを確保していくために、学内においてRCRについてポスター掲示を行う、各部活動の顧問にRCRの存在を把握してもらい、アスリハが必要な学生アスリートや部活動中に起きた場合に応急処置が必要な場合など、RCRを利用してもらえるように周知活動も必要であると考え。

5. 結論

RCRの質の高いサポートには、学生アスリートに対しアンケート調査を実施し、サポートに対するフィードバックも必要であると考え。また、充実した実習現場を整えていくためには、利用する学生アスリートの人数を確保し、多くの症例にふれることのできる環境づくりが必要であると考え。

参考文献

- 1) 山本利春 (2007) : アスレティックトレーナーの任務と役割, 河野一郎 (監修), 公認アスレティックトレーナー専門科目テキスト1 アスレティックトレーナー専門科目テキスト1 アスレティックトレーナーの役割, 財団法人日本体育協会, 第1版, 2007, p29-31
- 2) 小林寛和 (2007) : アスレティックリハビリテーションの概要, 河野一郎 (監修), 公認アスレティックトレーナー専門科目テキスト7 アスレティックリハビリテーション, 財団法人日本体育協会, 第1版, 2007, p11

付録1. 新規来室者の記録書

九州共立大学 RCR 傷害評価用紙

記入日: 西暦 _____ / _____ / _____
 学籍番号: _____
 (フリガナ)

来室目的: 病院紹介 ・ 応急処置 ・ 傷害相談
リハビリ ・ コンディショニング

氏名: _____ 病院名: _____

生年月日: 西暦 _____ / _____ / _____ (_____ 歳) 診断名: _____

学部・学年: (スポーツ・経済) 学部, _____ 年 手術日: _____ / _____ / _____ 術後: _____ 日(約 _____ 週)

所属クラブ: _____ 病院でのリハビリ: 有(現在・過去) ・ 無

種目/ポジション: _____ 競技歴: _____ 身長: _____ cm 体重: _____ kg

既往歴・併存疾患: _____

傷害名(評価結果): _____

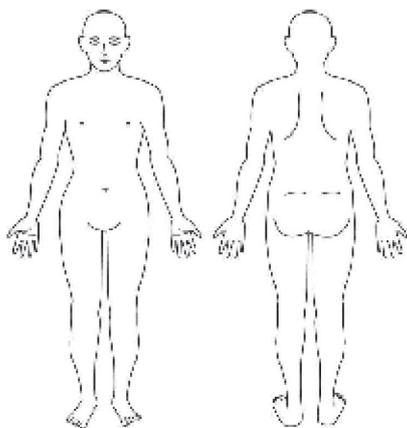
【Subjective(主観的情報, 問診)】

受傷日: _____ / _____ / _____ 初・再 _____ 主訴: _____

来室までの期間: _____ 日(約 _____ 週) 受傷機転: _____

受傷場所: _____
 (練習・試合・その他)

受傷部位: _____ (外傷・障害)



【Objective(客観的情報, Observation/Palpation/ Stress Test)】